

## 【暗証聖句】

「なぜなら、わたしたちは皆、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです。」コリントの信徒への手紙二 5 章 10 節

## 【日・最後の審判】

今週の暗唱聖句にあるように、わたしたちは皆、最後に、キリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、行ったことに応じて、報いを受けなければなりません。このことを多くの人が無知に生きています。裁き、あるいは審判という言葉に不安を感じる人は多いことでしょう。それは誰しも、自分の中に隠れた罪があることを自覚しているからかもしれません。

ところが、ダニエル 7:22 を見ると、「やがて、「日の老いたる者」が進み出て裁きを行い、いと高き者の聖者らが勝ち」と書かれてあります。この言葉を読んだとき、はっとさせられるのです。そもそも通常裁きというのは、有罪を確定させるためのものではなく、有罪なのかそれとも無罪なのかを確定させるためのものです。これは神様の審判においても同様で、有罪となるものもあれば、無罪となるものもあるということです。そして、ダニエル 7:22 で、「いと高き者の聖者らが、(裁きにおいて、勝利を)勝ち」とることになると書かれてあるのです。つまり、真のクリスチャンたちにとって最後の審判とは、無罪宣告を受けるためのものなのです。しかし、罪深い私たちがなぜ無罪となりえるのでしょうか。それはイエス様が私たちの身代わりとなって十字架にかかってくださったからです。そのことを信じるものたちを、イエス様は裁きの席で、弁護してくださるのです。

ところで、ヨハネ 3:18 に「御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである」と書かれてあります。これは、イエス様を信じる者は裁きを受けないという意味でしょうか。そうではありません。これは今述べたように、罪の宣告を受けないという意味なのです。またそれと共に、裁くという言葉には、分けるという意味があります。イエス様は「すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、羊を右に、山羊を左に置く」(マタイ 25 章 32、33 節)と言われたように、裁きとは神様の御前で右と左に、神様を信じる者と信じない者とに分けることでもあります。その意味で、「御子を信じない者は既に裁かれている」と、イエス様は言われたのです。

## 【月・再臨前審判】

聖徒たちに対する最後の審判はいつ起こるのでしょうか。それは当然のことながら、再臨の前に起こらなければなりません。すべての審判が完了したとき、イエス様は天から再び地上に戻って来られます。それゆえ最後の審判を、再臨前審判と私たちは呼んでいます。その荘厳な光景をダニエルは幻で見せられました。

「なお見ていると、王座が据えられ「日の老いたる者」がそこに座した。その衣は雪のように白く、その白髪は清らかな羊の毛のようであった。その王座は燃える炎、その車輪は燃える火、その前から火の川が流れ出ていた。幾千人が御前に仕え、幾万人が御前に立った。裁き主は席に着き、巻物が繰り広げられた」ダニエル 7 章 9、10 節

この再臨前審判にはいくつかの前提があります。まず、義人も悪人も死者は復活まで無意識のまま墓に留まっているということ。二つ目に、これは全人類に及ぶ普遍的なものであるということ。三つ目に、最後の裁きは復活に先立って行われるということ。つまり、義人は第一の復活に先立って、悪人は第二の復活に先立って裁きを受けます。なぜなら、復活の際に、それぞれの報いを受けるからです。そして、その中でも特殊なのは再臨の時に生きている真のクリスチャンたちです。彼らは生きているこの瞬間に最後の審判が行われることとなります。

この再臨前審判の概念について、マタイ 22 章 10～13 節の婚礼のたとえの中で、「そこで、家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになった。王が客を見ようと入って来ると、婚礼の礼服を着ていない者が一人いた。王は、『友よ、どうして礼服を着ないでここに入って来たのか』と言った」という客が調査されている場面や、黙示録 11 章 1 節で「それから、わたしは杖のような物差しを与えられて、こう告げられた。「立って神の神殿と祭壇とを測り、また、そこで礼拝している者たちを数えよ」と、神様が事細かく図り、数えておられる描写の中にも表されています。

では、いつ義人の再臨前審判が行われるのでしょうか。その始まりについては、ダニエル 8:14 の「日が暮れ、夜の明けること二千三百回に及んで、聖所はあるべき状態に戻る」との預言解釈から、1844 年に始まったことがわかりますが、いつ終わるのかはわかりません。ただ、それは非常に近づいていると言うことができるでしょう。

## 【火・千年期の裁き】

聖書には、イエス様の再臨とその後の出来事について、いくつかのことが示されています。

① 2 生きている聖徒と復活した聖徒が一緒に空中で主にお会いするという事です。

テサロニケー 4 章 16、17 節「すなわち、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラツパが鳴り響くと、主御自身が天から降って来られます。すると、キリストに結ばれて死んだ人たちが、まず最初に復活し、それから、わたしたち生き残っている者が、空中で主と出会うために、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられます。このようにして、わたしたちはいつまでも主と共にいることとなります。」

② 天に用意された場所に住むことです。

ヨハネ 14 章 2、3 節「わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」

③ 千年の間天に住み、キリストと共に統治することです。

黙示録 20 章 6 節「第一の復活にあずかる者は、幸いな者、聖なる者である。この者たちに対して、第二の死は何の力もない。彼らは神とキリストの祭司となって、千年の間キリストと共に統治する。」

④ 千年期が終わると天のエルサレムごと新しい地上に降りてくることです。

黙示録 21 章 1、2 節「わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなつた。更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。」

ところで、千年の間天を住まいとしている間、黙示録 20 章 4 節に、「わたしはまた、多くの座を見た。その上には座っている者たちがおり、彼らには裁くことが許されていた」とあるように、私たちは神様と共に裁きに加わるようです。この場合の裁きとは、救われなかった者たちや墮天使たちに対して裁きです。

コリント一 6 章 2、3 節「あなたがたは知らないのですか。聖なる者たちが世を裁くのです・・・わたしたちが天使たちさえ裁く者だということを、知らないのですか」

この天使たちさえ裁くとは、墮落した墮天使のことですが、救われた者たちは、墮天使も含めて、救われなかった者たちがなぜ救われなかったのか、その裁きを通して知ることになります。これは神様の裁きが正当であったことを確認するためです。私たちは天国において、なぜあの人救われなかったのだろうと疑問を持ち続けることはありません。

## 【水・執行審判】

悪人に対する神様の執行審判は、最終的かつ不可逆的なものです。かつて、「神は、罪を犯した天使たちを容赦せず、暗闇という縄で縛って地獄に引き渡し、裁きのために閉じ込められた」(ペトロの手紙二 2 章 4 節)ように、またかつて、「神は昔の人々を容赦しないで、不信心な者たちの世界に洪水を引き起こし・・・ソドムとゴモラの町を灰にし、滅ぼし尽くして罰し」(ペトロの手紙二 2 章 5、6 節)のように、「その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれ・・・すべてのものは滅び去るのです」(ペトロの手紙二 3:10, 11)。

神様は残酷な方だと感じるでしょうか。しかし神様はそうならないように、忍耐し人々が改心するのを待っておられたのです。そして人の罪を赦すために、御子の命までささげられたのです。この地上の人間の裁きでさえ、必ず刑は執行されます。まして神様は刑をうやむやになさることはありません。神様はその刑から逃れる道を提示してくださいました。この世の常識からすれば考えられないことです。それにも関わらず、滅びゆく者たちは神様を拒み、逆らい、あるいは無視し続けたのです。もはや言い逃れはできないのです。

## 【木第・第二の死】

神様を信じない多くの人たちは、第二の死を知りません。

黙示録 20 章 13～15 節「海は、その中にいた死者を外に出した。死と陰府も、その中にいた死者を出し、彼らはそれぞれ自分の行いに応じて裁かれた。死も陰府も火の池に投げ込まれた。この火の池が第二の死である。その名が命の書に記されていない者は、火の池に投げ込まれた。」

この地上での死は第一の死です。これは罪の支払う報酬であり、善人も悪人も経験します。では、第二の死とは何のことでしょうか。人は二度死ぬということでしょうか。その通りです。千年期の後、悪人たちは一斉に眠りから覚めます。それは裁きが執行されるためです。火の池に投げ込まれるのです。しかし、罪を悔い改めて、イエス様を救い主として信じ、主の教えに従って歩むものたちには、この第二の死を経験することはありません。主のご再臨のときに、永遠の命に生きるものとなるために、眠りから覚めるからです。

第二の死は、救いの道が提示されていたにもかかわらず、それを拒否した結果です。自らその道を選んだということですから。救われるのか、滅びるのか、それはすべて一人一人の選択なのです。